TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

内藤正敏　異界出現

Naito Masatoshi: Another World Unveiled

2018 年 5 月 12 日（土）―7 月 16 日（月･祝）

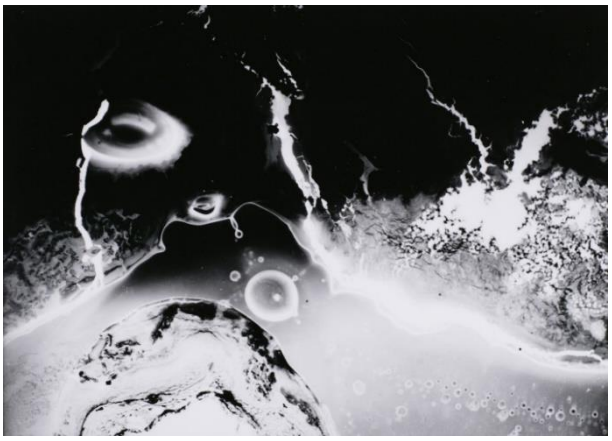
展覧会概要

このたび東京都写真美術館は、「内藤正敏 異界出現」展を開催します。本展は異色の写真家・内藤正敏の 50 年を超える軌跡をたどりご紹介します。作家は 1960 年代の初期作品において、化学反応で生まれる現象を接写して生命の起源や宇宙の生成の姿を捉えました。その後、山形県・湯殿山麓での即身仏との出会いをきっかけに、1960 年代後半から 80 年代にかけて、主に東北地方で民間信仰の現場に取材した〈婆バクハツ！〉〈遠野物語〉など刺激的な写真シリーズを次々と発表しました。「モノの本質を幻視できる呪具」である写真と、見えない世界を視るための「もう一つのカメラ」である民俗学を手段として、現世の向こう側に幻のように浮かび上がる「異界」を発見する人、内藤正敏。そのヴィジョンは、今日の私たちに大きな戦慄と深い洞察を与えてくれるはずです。本展は主な写真シリーズを通して、その 50 年を超える足跡をたどるとともに、その表現世界に通底する独自の世界観、生命観を捉えていきます。

《死者供養をする老婆、恐山》〈婆バクハツ！〉より　1969 年　ゼラチン・シルバー･プリント

主な出品作品

初期作品　1959―64 年



初期の内藤正敏は生命の起源や宇宙の生成、消滅に関する学説や理論から着想を得た写真作品を雑誌『カメラ芸術』を中心に発表しました。SF（サイエンス・フィクション）的想像力を持つ内藤の写真は、1963 年から 64 年にかけて早川書房「ハヤカワ・SF・シリーズ」の表紙を飾りました。なかでも作家が制作に力を注いだのが、天然高分子（ハイポリマー）の化学反応を接写したシリーズ〈コアセルベーション*〉です。「地球生命 35 億年の神話的な写真叙事詩」を思い描いて制作したという本シリーズは在学中、応用化学を専攻した内藤が卒業論文のために行った実験撮影から生まれました。

＊旧ソ連の生化学者オパーリンによる生命の起源説のキーワード

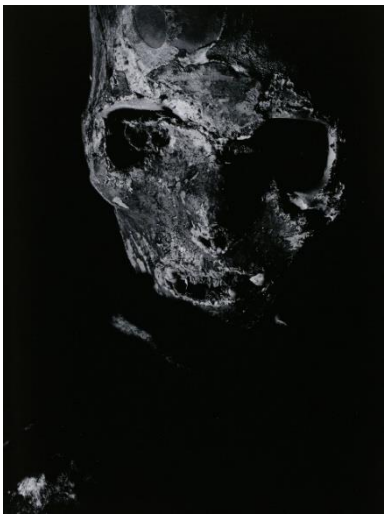
左：コアセルベーション　1962-63 年　ゼラチン・シルバー・プリント　作家蔵

右：早川書房刊「ハヤカワ・SF・シリーズ」の表紙　（写真・内藤正敏）　小松左京『復活の日』 1963-64 年　作家蔵

〈即身仏〉1964―1966 年

内藤は 25 歳の時、山形県・湯殿山麓にある注連寺で「鉄門海上人」の即身仏との出会いに大きな衝撃を受けます。その後、内藤は 4× 5 カメラで湯殿山を中心に即身仏をモノクロームで撮影しました。この戦慄の体験が作家活動を一変させる原体験となりました。

> ふつう、死者は生きている人間から視られるものだ。ところが生きている私が、死者である鉄門海上人に視つめられている。ここで生と死の視線が逆転している。専門が化学出身で、まだ若かった私には強烈なカルチャーショックだった。（中略）そして即身仏の圧倒的な存在感の前に、暗室の中で造ってきた作品が嫌になり、ついには全面的に自己否定して制作を中止した。 内藤正敏「写真と民俗学」展図録　吉祥寺美術館　2009 年より



《鉄門海上人 注連寺》〈即身仏〉より　1964 年 ゼラチン・シルバー・プリント

このリリースに掲載されている作品のうち、記載のないものは東京都写真美術館蔵です。

〈東北の民間信仰〉1968 年

内藤の仕事はつねに複数の関心が多層的に重なり合って発展していきます。1967 年に手がけた北海道開拓写真（田本研造、武林盛一らによる明治期に撮影された写真群の再評価を提唱する「私説・田本研造論」季刊写真映像 1969 年 1 号にて発表）の調査において、土地の「生々しい記録写真」に魅せられた内藤は、津軽、下北、庄内などで〈東北の民間信仰〉を撮影し始めました。本シリーズは〈婆バクハツ！〉へと発展していきます。

《かまど神、東和町》〈東北の民間信仰〉より　1968 年

ゼラチン・シルバー・プリント

〈婆バクハツ！〉1968―70 年

恐山のイタコたちを中心とした東北の民間信仰をテーマとする、作家の代表シリーズ。自由で即興的な撮影や東北のダイナミズムを直感的に伝える構成、タイトルのユニークさを含め、他の追随を許さない強烈なインパクトをもっています。

《お籠りする老婆　高山稲荷》〈婆バクハツ！〉より 1969 年

ゼラチン・シルバー・プリント

> 死者の霊を呼ぶ口寄せ巫女は、むかしは各地にいたが、姿を消してしまった。（中略）お婆さんたちの底抜けの明るさは、死を通して得ることのできた明るさといってよいだろう。東北の根底にあるのは、死から生の輝きを逆照射する思想なのではないだろうか。生から死は視えないが、死からは生の本質がよく視える。
>
> 「遠野物語／婆バクハツ！」『岡本太郎と戦後写真』展図録　川崎市岡本太郎美術館　2001 年より

〈遠野物語〉1971―1975 年、1983 年

1971 年から 75 年にかけて岩手県・遠野市での撮影を中心としたシリーズ（1983 年写真集刊行）。民俗学の創始者・柳田國男の代表作『遠野物語』をベースとして、この地の生活や習俗、信仰を捉えました。作家にとって 1970 年代に撮影した遠野の地は、「佐々木喜善」、「山人の住む闇のアジール（聖域、避難所）」、「金属民俗学」といった作家のその後の関心が、テーマの母体となりました。

《カッパ淵 土淵》〈遠野物語〉より 1972 年 ゼラチン・シルバー・プリント

> 川の岸の砂の上には河童の足跡というものを見ること決して珍しからず。　柳田國男『遠野物語』より

〈東京　都市の闇を幻視する〉1970―85 年

> 東京をカメラを持って歩いていると、ところどころにタイムトンネルのような穴があいていて、“江戸”に通じているように思えることがある。
>
> 内藤正敏「東京論ノート」『内藤正敏写真集　東京』名著出版 1985 年より

「江戸・東京」は内藤にとって「東北」とともに重要なテーマです。江戸の時空へと通じている浅草の見世物小屋や、帰る故郷のない人間のふきだまりとしての大都市・東京を象徴するホームレス、混沌とした繁華街の狂騒。内藤は、都市の内側にある闇の世界に魅せられました。このシリーズには、昭和の終わりの時代、東京という都市が放出していたエネルギーが強く表れています。その後、内藤は浅草を入口として、上野、銀座、新宿へと撮影地を広げ、70 年から 85 年までの長い年月をかけて、都市を撮り続けた成果を写真集『東京』にまとめました。

上：《キャバレーの看板　銀座》〈東京　都市の闇を幻視する〉より　1971 年　ゼラチン・シルバー・プリント

下：《酒を飲む浮浪者　新宿》〈東京　都市の闇を幻視する〉より　1970 年　ゼラチン・シルバー・プリント

〈出羽三山〉1980―1982 年

本シリーズは鮮やかなカラー写真が中心となり、それまでの内藤作品に見られた偶然性や実験性の前衛的な傾向は影をひそめ、より重厚な狙いが定められた写真表現が見られます。仏像や神像たちの姿、「大地から湧き出てきたような生命力あふれるたくましさと激しい異形の風貌」を真正面から明瞭な光の下で鮮やかに映し出しました。

《お沢仏 梵天帝釈両部大日大霊権現像 大日坊》〈出羽三山〉より 1982 年 銀色素漂白方式印画
作家蔵

〈出羽三山の宇宙〉1984 年

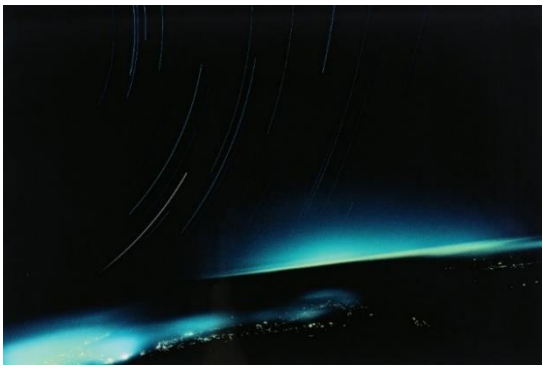
暗闇にゆらめくローソクの灯りを光源にして、自身の〈出羽三山〉の写真を全長 3 メートルの超大型カメラで接写し、構成した実験作は、写真技術の限界を超えた撮影と評されました。露光に 1 時間から 2 時間半を要する、精神力が試される撮影の末に、「まったく別な出羽三山」を生み出しました。

《びんずる尊と羽黒鏡、海向寺、出羽三山神社》〈出羽三山の宇宙〉より 1984 年
発色現像方式印画　作家蔵

> 出羽三山にはみだりに一般人が近づくことを禁ずる「秘所」と呼ばれる聖域がある。（中略）そして修行中に秘所に行く回峰業の目的は秘所で出羽三山の宇宙と一体化することである。即身仏も入定して宇宙の根源である湯殿山の大日如来と一体化した姿にほかならない。即身仏の背後には、無限の宇宙が広がっているのである。
>
> 内藤正敏「写真と民俗学」展図録　吉祥寺美術館　2009 年より

〈神々の異界〉　1990 年―

内藤は、修験道の山岳聖地をテーマに、民俗学の見地から、隠されたその聖地の空間思想や宗教的意味を解読し、その成果に基づいてカメラの方向を定めて撮影します。たとえば春分の日に、山梨県・七面山から望む富士山頂からの日の出は、太古の太陽崇拝の姿を明らかにし、富士山八合目にある烏帽子岩から東京方面を望む風景は、享保 18（1733）年に徳川幕府の政治に抗議して断食死を遂げた修行者・食行身禄（じきぎょう　みろく）の視線と重なり合います。日本の神々たちの空間思想、マンダラ的宇宙を視覚化するこの仕事を、彼は 90 年から最近に至るまで継続しています。



《七面山》〈神々の異界〉より　1990 年　発色現像方式印画　作家蔵
《富士山》〈神々の異界〉より　1992 年　発色現像方式印画　作家蔵

> 写真は目に見える現実だけしか写し出せないと考えるのは間違いだ。写真は、カメラという機械を使うことで、人間の意識を超えて、視えない世界が“写る“ことがある。めったに無いことだが、写真に集中していると、時々、シャッターを押した人間が、想像もしていなかった世界が写ることがあるのだ。[中略]
> そして写真の背後に隠されている世界が無性に知りたくなり、私の新しい民俗学の開拓が始まる。[中略]
>
> 私にとって、写真がモノの本質を幻視する呪具であるとすれば、
> 民俗学は見えない世界を視るための“もう一つのカメラ”だ。
>
> 内藤正敏「写真と民俗学」展図録　吉祥寺美術館　2009 年より

本展のみどころ

幻視者・内藤正敏の視点

写真家であり、民俗学の第一人者である内藤は、「モノの本質を幻視できる呪具」である写真と、見えない世界を視るための「もう一つのカメラ」である民俗学を手段としながら、生命の起源や宇宙の生成の根源を探求し続けています。そして、内藤の関心は自身の作品により触発され、深化します。本展は生と死、現世とあの世の二つの世界の境界に生きる修験者*、あるいは霊媒者のような視点で異界を幻視し、写し撮ってきた内藤の約 50 年の軌跡をたどりながら、独自の世界観、生命観に迫ります。

*修験者：日本古来の山を祖霊の住む他界とみなして崇める山岳信仰と、仏教の密教、道教などが結びついた宗教道の信者のこと

前衛的な特殊技法

大学時代、化学を専門に学んだ内藤は、制作過程において独自の実験的な手法を取り入れています。化学反応を写した〈コアセルベーション〉などの初期作品では暗室でのネガポジ反転、多重露光やコラージュなど特殊技法を駆使するなどのほか、〈婆バクハツ！〉シリーズなどを手掛けた 60 年代後半では報道用にしか用いられなかったストロボ撮影を意識的に取り入れ、さらにノーファインダーで撮影することで強い光を受けて闇夜に怪しく存在する被写体の姿が強調されています。

《月夜の盆踊り　赤倉法泉院》〈婆バクハツ！〉より　1969 年
ゼラチン・シルバー・プリント

TOP コレクションならではのラインナップ

本展では当館が所蔵する内藤正敏作品 117 点をすべて出品いたします。なかでも「東京を表現、記録した写真作品を収集する」という収集の基本方針をもつ当館のコレクションより〈東京　都市の闇を幻視する〉全 52 点を総覧いただけます。また、内藤が手掛けた北海道の開拓写真調査から「写真の本質の美」を見出し、その後の東北調査へと向かわせるきっかけとなった、明治期の北海道開拓写真 2 点を展示します。そのほか、内藤が誌面を作品発表の場としていた 1959 年の『カメラ芸術』等、貴重な図書資料からも、内藤正敏の多角的な仕事を紹介します。

武林盛一《幌内駅》1871－1880 年　鶏卵紙

展示構成（出品点数 186 点、ほか資料）

1　初期作品
2　即身仏、北海道開拓写真の発掘、東北の民間信仰
3　婆バクハツ！
4　東京　都市の闇を幻視する
5　遠野物語、出羽三山、出羽三山の宇宙
6　神々の異界
7　戦慄――東北芸術工科大学「内藤正敏の軌跡」展より 2004 年
8　聖地　※本展初出品

作家略歴

内藤正敏　Naito Masatoshi
1938 年東京都生まれ。早稲田大学理工学部で、化学を専攻後、フリーの写真家になり、初期は宇宙・生命をテーマに化学反応を撮影する「SF 写真」に取り組んだ。25 歳で即身仏に出会ったことをきっかけに、羽黒山伏の入峰修行に入る。写真集『婆 東北の民間信仰』(1979 年)、『出羽三山と修験』(82 年)、『遠野物語』(1983 年)、『東京 都市の闇を幻視する』(1985 年）などを発表。多数の研究書・論文を発表する民俗学者でもある。元・東北芸術工科大学大学院教授、東北文化研究センター研究員。

関連事業

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・第4金曜日の14:00より担当学芸員による展示解説を行います。
展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

トークイベント「内藤正敏の世界」

2018年6月 8 日(金)　18:00－19:30　飯沢耕太郎（写真評論家）×松岡正剛（編集工学者）
2018年6月29日(金)　18:00－19:30　赤坂憲雄　（民俗学者・学習院大学教授）
定員：各回50名　会場：東京都写真美術館 1階スタジオ
※当日午前10時より1階総合受付にて整理券を配布します。※各回とも作家本人は出演しません。
※プログラムはやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

『内藤正敏　異界出現』
出品作を全点収録したカラー版、全187頁。
内藤正敏「もう一つのカメラ　写真とフォークロア」(1987年)を再録。和英併記。
執筆：石田哲朗（東京都写真美術館学芸員）　発行：東京都写真美術館　　価格：2,160円(税込)

開催概要

内藤正敏　異界出現
Naito Masatoshi: Another World Unveiled
2018 年 5 月 12 日（土）―7 月 16 日（月・祝）
開館時間：10:00―18:00（木・金は 20:00 まで）※入館は閉館の 30 分前まで
休館日：毎週月曜日（ただし 7/16［月・祝］は開館）
主催：東京都 東京都写真美術館、朝日新聞社
会場：東京都写真美術館 2 階展示室
観覧料：一般 700(560)円、学生 600(480)円、中高生･65 歳以上 500(400)円
※（　）は 20 名以上の団体料金
※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害をお持ちの方とその介護者は無料
※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当まで連絡ください。掲載点数が 1 点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース 1 ページ目の下記図版をお薦めいたします。

《死者供養をする老婆、恐山》〈婆バクハツ！〉より　1969 年　ゼラチン・シルバー･プリント
東京都写真美術館蔵

このリリースに掲載されている作品のうち、記載のないものは東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。

〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内　東京都写真美術館
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　石田哲朗　t.ishida@topmuseum.jp　藤村里美　s.fujimura@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子　平澤綾乃　前原貴子 press-info@topmuseum.jp

内藤正敏　異界出現　章解説

1　初期作品

Early Works　1959-64

作家は初期の頃、生命の起源や宇宙の生成に関する当時の科学的学説に着想を得て、「ＳＦ写真」と呼ばれる幻想的な写真作品を制作しました。〈トキドロレン〉（作家の造語で「時間泥棒連合」の意）は、地球から時間を消滅させる生命体のイメージ。東京湾岸の埋立地風景を合成した〈白色矮星〉は、恒星が消滅する直前の現象。実父をモデルとした目玉のコラージュが印象的な〈キメラ〉は、同一生命体の中で遺伝子型の異なる細胞が混ざり合う現象。鮮やかな色彩が乱舞する〈古生代〉は約 5 億年前の地球の海で多様な生命が爆発的に増殖した時代を表しています。

特に力を注いで制作された〈コアセルベーション〉は、旧ソ連の生化学者オパーリンによる生命の起源説を元にしており、「原始地球の海で無機物からアミノ酸が合成、タンパク質、生命へと進化する（…）地球生命 35 億年の神話的な写真叙事詩」を思い描いたものです。高分子物質（ハイポリマー）と有機溶剤等の化学反応を接写するという発想や撮影方法には、大学時代に学んだ応用化学の研究が生かされています。作家は多重露光、ネガポジ反転といった特殊技法を巧みに組み合わせて、これらの作品を制作しています。また内藤はこの当時、早川書房から刊行された数々のＳＦ小説の表紙写真も手がけています。

2　即身仏、北海道開拓写真の発掘、東北の民間信仰

Sokushinbutsu [Mummified Buddhist Monks] , Discovering the Early Photographs in Hokkaido, The Folk Religions in Tohoku
1964-68

内藤は 63 年、山形県・湯殿山麓で鉄門海上人*の即身仏との出会いから大きな衝撃を受け、幻想的な「SF 写真」の制作を止めてしまいました。それ以降彼は、主に東北地方の民間信仰や宗教文化をテーマとしたドキュメンタリー写真を手がけます。〈即身仏〉では、百年以上前に入定した僧侶の即身仏と対峙した時に内藤が受けた、死と生が逆転していることへの驚きが、クローズアップ撮影によって強く迫ってきます。67-68 年に彼は「写真 100 年」展の編集委員を担当し、明治初期の北海道開拓時代の写真群を発掘する仕事を手がけました。内藤は北海道で活躍した写真師・田本研造、武林盛一らの業績を調査し、その歴史的な位置づけを行い、彼らの現実に対峙する姿勢を、自身の作家活動の理想とするようになりました。

*鉄門海上人（1759-1829［宝暦 9-文政 12］）は注連寺の僧侶。湯殿信仰の布教と衆生救済の聖者として篤い信仰を集めた。71 歳で入定し、即身仏として同寺に祀られている。即身仏とは、修行者が苦行を通して自らの意志で身体を保ったままミイラ化したもので、「仏」として寺に祀られる。即身仏の例は東北地方、とくに湯殿山に集中的に多く見られる。

3　婆バクハツ！

Old Hags Burst Out!　1968-70

津軽地方・恐山における、イタコ信仰をテーマとした代表的写真シリーズ。作家は「どう写るかわからない写真本来の偶然のおもしろさ」を求めて、主に暗闇の中で行われる祭礼の姿を、当時は新聞報道などごく一部で特殊に使われていたにすぎなかったというストロボを多用して、ノーファインダーで撮影しました。また内藤は、この民間信仰の現場へのフィールドワークから、「死から生の輝きを逆照射する思想」という自身の東北文化論の核心を得ました。「お婆さんたちは、死者を供養し、イタコの口寄せで死者の声を聞き、さんざん泣きあかした後、にぎやかに踊りあかす。お婆さんたちの底抜けの明るさは、死を通して得ることのできた明るさといってよいだろう。東北の根底にあるのは、死から生の輝きを逆照射する思想なのではないだろうか」*と作家は語っています。

*内藤正敏 「遠野物語／婆バクハツ！」『日本発見 岡本太郎と戦後写真』展図録、川崎市岡本太郎美術館、2001 年より。

4　東京　都市の闇を幻視する

Tokyo: A Vision of Its Other Side
1970-85

「東京をカメラを持って歩いていると、ところどころにタイムトンネルのような穴があいていて、“江戸”に通じているように思えることがある」*。内藤にとって、東京の魅力とは境界領域（異界への入口）の魅力であり、そこでは過去と現在、光と闇、生と死、といった多義的なイメージが重なり合っています。そこで写し出されたものは「まったくバカバカしくて狂ったような東京」、「帰る故郷のない人間のふきだまり」の姿でした。内藤は浅草、上野、銀座、新宿といった繁華街に盛んに足を運び、70 年から 85 年までの約 15 年もの長い年月をかけて、独自の視点から撮り続けた都市の姿を写真集「東京」にまとめました。「東京が底知れぬエネルギーを持っているのも、現代の漂泊者たちが住むことのできる闇を内部に持っているからだろう」と彼は述べています。

*内藤正敏「東京論ノート」『内藤正敏写真集　東京―都市の闇を幻視する』名著出版、1985 年より。

5　遠野物語

Tono Monogatari [The Tales of Tono]
1971-83

作家はこのシリーズで、日本民俗学のルーツとなった柳田國男の説話集『遠野物語』(1910［明治 43］年）の原風景を探ろうとします。柳田に遠野の伝承を語り聞かせた文学研究者・佐々木喜善（鏡石）（1886-1933［明治 19-昭和 8］）の生家や墓、作中に登場する「ダンノハナ」などの地名、カッパ伝説の川など、柳田の著作と直接関連した写真が数多く含められています。内藤は、遠野の風景や人々の暮らしを通して、その背後にある民俗的な風土や、生と死の静かに共存する様を描き出します。作家は、ストロボの光によって闇の中に見えなかった風景が一瞬浮かび上がるのは「実にスリリング」だと語ります。ここでは光が届くかどうか分からない遠い風景にまでストロボを向けて撮影し、その結果、いくつかの写真には幻想的な効果が生まれています。

6　出羽三山、出羽三山の宇宙

Dewa-sanzan [Three Mountain of Dewa], The Cosmos of Dewa-sanzan
1980-1984

作家は 80 年代の初めに、修験道の聖地である羽黒山、月山、湯殿山の「出羽三山」をテーマとしたシリーズを手がけました。ここでは鮮やかなカラー写真が中心となっています。彼は東北の仏像や神像たちの姿、「大地から涌き出て来たような生命力あふれるたくましさと激しい異形の風貌」*を真正面から明瞭な光の下で鮮やかに写し出しています。

〈出羽三山の宇宙〉は、ポラロイド 20×24 インチ写真システムという超大型カメラを用いて、ロウソクの光を光源にして撮影された実験的作品。自身の〈出羽三山〉の写真を複写しています。露光は 1 時間から 2 時間半かかり、その間ずっと精神力を集中し続け、結果として「私自身の“出羽三山”を写すことによって、まったく別な“もう一つの出羽三山”」が出現しました。

*内藤正敏「カメラマン取材ノート」 『日本の聖域　第 9 巻 出羽三山と修験』 佼成出版社より。

7　神々の異界

Another World of Deities
1990-2012

「修験道の霊山では“視える自然”の背後に、人間が意味づけた“視えない自然”が隠されている」と作家は語ります。このシリーズは、山々の隠された「空間思想」を民俗学で解読して場所とカメラの方向を定め撮影することで、修験道のもつ自然観や、霊山に隠された宗教的な意味を明らかにしています。この方法を彼は「人間が一方的に自然を写すネイチャーフォトとは逆の視線」と呼びます。

日蓮聖人と関わりの深い山岳信仰の聖地〈七面山〉では、春分の日に山頂から富士山を仰ぐ時、太陽がちょうど富士山の中心を貫くように昇る現象を捉えています。〈富士山〉では、下界・東京の夜景を見下ろす江戸時代の行者・食行身禄（じきぎょうみろく)*の視線が、〈石鎚山〉や〈室戸岬〉では、四国で修行した若い頃の弘法大師の視線が、ここには重ね合わされています。〈月山〉では山頂の「磐座」と呼ばれる巨石を中心として、修験道で思想的に意味づけられた天体の動きが捉えられています。

作家は日本の神々たちの空間思想、マンダラ的宇宙を視覚化するこの仕事を、90 年から最近にいたるまで継続しています。

*食行身禄（じきぎょうみろく）(1671-1733［寛文 11-享保 18］)。江戸幕府の政治に抗議して、富士山八合目の烏帽子岩の前で断食の末に入定、即身仏となったとされる修行者。この出来事をきっかけとして江戸では大きな富士講ブームが起こった。

8　東北芸術工科大学「内藤正敏の軌跡」展より

From the Solo Exhibition of Naito Masatoshi, Tohoku University of Arts & Design
2004

内藤は 2000 年に山形市、東北芸術工科大学の教授に就任し、この東北唯一の芸術大学を拠点として、写真家、民俗学者、教育者として活発な活動を展開しました。04 年には自身のキャリアを振り返る回顧展を大学ギャラリーで 3 期にわたって開催しました。本展では、当時展示された大型プリントを用いて、初期作品および《出羽三山》シリーズを再構成して展示しています。ここでは、一見断絶があるように思われる内藤正敏の初期作品と一連の東北の写真が、実は一貫した多神論的なコスモロジーでつながっていることが体感的に感じられるでしょう。